



TITLE:

月星の紋

AUTHOR(S):

山崎, 幸夫

CITATION:

山崎, 幸夫. 月星の紋. 天界 1938, 19(211): 25-27

ISSUE DATE:

1938-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167726>

RIGHT:

月 星 の 紋

山 崎 幸 夫

延長9年7月、二度の敗戦のあとだつた。雪崩を打つて河原から激流に落込んだり又追矢にやられて堤に折かさなつてゐる兵士の上を馬で森まで逃げた事がどうしても彼の目から消えなかつた。その前の戦はもう考へたくなかつた。しかし思はず小指のない左手を見たがすぐにその眼は後の祭壇に向けられた。陣中の事なので祭壇と云つてもただ白無垢を掛けた床几の上に御幣をつけた神を置いて、その前に「北斗七星妙見菩薩」と雄渾に書いた白二羽が掛けてあるだけだつた。良兼は静かにその前に歩を進めた。帯木目の清しい砂が毛靴の下でさくさくとなつた。

x

x

x

星を仰いだ。青い美しい空だつた。いつも見る北辰だつたが今夜は特に輝やいて見えた。地平線に近い北斗に合掌した良兼がようやく眼を開いた時一ツツの星がうるんでぼんやりと二重にも三重にも波紋の様に擴つてそれが妙見菩薩の御尊體に變つて行つた。

帯の白蛇が動いてゐる様だつた。菩薩はその白蛇をとつてパツと投げつけた一線ひらめいて消えた。ハツト背中をつかれた様に思つて菩薩を見た時もうそこにはもとのまゝの北斗が輝いてゐた。たどる様に白蛇の消えた方を見た時再びキツと全身を硬直させた。正しくその方向は敵。國香の陣地ではないか。日頃信仰してゐる北斗妙見菩薩の御加護だ。今夜の戦ひこそ勝たなければならない。菩薩は既に第一矢を御放ち下されたのだ。良兼はいつか祭壇に合掌してゐた。その鎧の紐に螢がとまつてゐた。

幔幕の外には既に弟良文に指揮されて集つた軍勢が闇の草原に待機してゐた。もう大将の命令を待つばかりに勢んでゐる兵士等が流星を見つけたらしい。

「又飛んだ」

「おい、こんどのは大きかつたぞ」

「何どこだ」

「馬鹿」

x

x

x

戦に勝つたよろこびは頭をなぐられてもうれしい位だつた。昨日の夜明から終にまる1日、敵の本陣は夕方火を起して宵闇を赤く染めた時、とうとう勝つたと思つたが失はしきりに飛んで來た。昨夜に引かえ星一つ見えない空の下で伏勢のまま夜を通し今朝は一どきに攻め込んだのだつた。

「飲め」乾した大杯を侍臣の顔に突付けて弟良文を見た。そしてお互に大きな聲で笑つた。外庭の方も宴の真最中だ本丸は焼けてゐたが城廓や糧倉は残つてゐた。この城門に続いた中間部室も裏の方は壊れてそこから酔ひ唄つてゐる兵士等の姿が見えた何んとうれしい況景ではないか。

夕焼がしてゐたのも風が止んだのも誰も知らなかつた。互の顔が酔と共に見えなくなつて來た。良兼は杯をおいて窓に倚りかかつた。遠明りの西空に三日月が宵の明星と並んで丁度月が星を抱く様に接近してゐた。

「良文」

「……」

「見よあれを、三日月と明星」

「……」

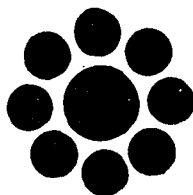
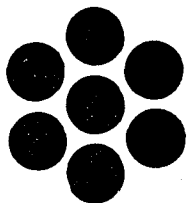
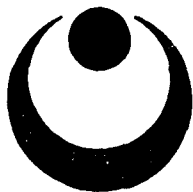
「三日月と明星、月と星と」

「うむ、月と星、北斗は」

弟が窓からのり出す様にして見たが木の影かそれともまだはつきり輝いてゐなかつたのかそれらしい星は見えなかつた。

「まだ早いと見へて見あたらぬが、月と星、うむ、月星の紋、兄者如何で御座る」

「月星、ほう面白い、日頃信仰の月と星を象つて吾家の紋——旗印に仰ぎまつれば、しかし……」



上ヨリ

月星、七曜、九曜

ぼうと後に明りがさして兵士の1人が燭臺をもつて這入つて來た良兼はすぐそれを取つて壁に掛けた「北斗七星妙見菩薩」の前に供へた。墨のにちみと布のほつけが見えるその前で懷紙を出して左手に持ちかえた。侍臣が矢立を差出した時弟もその前へ坐つた。

外庭には處々に篝火がもえて唄聲はまだ聞えてゐた。

後 記

月星の紋及七曜九曜（挿圖参照）の紋章は平民良文の流。千葉氏及其の一族の家紋である。そして千葉氏の妙見信仰は前述の良兼、良文兄弟より初まるもので千葉氏の轉住と共にこの妙見信仰はその地の人々にも移信せられ崇敬の念は祠堂として残された所もあつた事は千葉傳考記に見える。その型式は信仰に於てなされたとしても幾代も續いて多くの人に星辰への關心を與へた事は是非は別として天文普及の或る一面と見る事が出來よう。

本文の年代、人物及其の妙見信仰については史書に據る事實なるも、戦争状態は筆者の構想である。（昭和13年9月7日）

編輯室より 九月末、元氣よく山本主筆も歸つて來られました。本誌も丁度此の號から筆を新らたにして第19卷に踏み出します。非常時局の折からではありますが、宇宙の存する限り、星と人とのつながりは變らないのですから、本誌も讀者と共に益々健全に發達させたいと思ひます。本號は山本主筆がストックホルムから持ち歸られた材料を特に多く盛つて、寫眞も記事も、一見特輯號の觀があり、他に先んじて、最も確かな、又、生々しい學界の新消息を讀者に贈るわけです。従つて、多少の重複を避けるため、主筆の海外日誌の續きは次號にゆづります。藤波理學士の文は讀者に多くの新しい興味を起させるものと信じます。今後も相變らず一般會員からの趣味ある原稿を歓迎します。黄紙に4號で組んだ通俗文は、昨年以來本誌の呼びものとなつて、多くの讀者を惹きつけてゐますが、之れは之れだけで、集めて別冊に製本でも出来るやう、ページ數も別に付けてありますし、又暫くは、卷が改まつても、連續したページ數を押して行くつもりです。（A. B. C.）